

<エッセイ>日文研での一年

著者	コヴァルチューク マリーナ
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	68-71
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	http://doi.org/10.15055/00006691

<エッセイ>日文研での一年

著者	コヴァルチューク マリーナ
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	68-71
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	http://doi.org/10.15055/00006691

日文研での一年

マリナー・コヴァルチューク

私は日文研（国際日本文化研究センター）で一年間（二〇一三年七月〜二〇一四年七月）研究しました。研究テーマは、幕末及び明治初期の日本におけるロシア帝国のイメージ形成です。主要な研究資料は森有礼、福沢諭吉ほかその当時の優秀な日本人で、ロシアを訪問し、ロシアの国家やその国民について自分なりのイメージを持つことのできた人々の日記や回想録です。

幕末期の日本語資料を使用しての作業は時間も集中力も必要とするものでした。研究に着手したころは、一年間で必要な資料を集め、せめて部分的にでも分析ができればと思っていました。一年間で研究を完了できるとは思っていませんでした。

しかし私の心配は杞憂に終わりました。日文研は都会の喧騒から離れ、仕事をするのに最高の環境でした。招聘研究者にはすべて個室が用意されていました。そして私個人としては、日文研図書館もまた、むしろより重要な仕事場所と言えるところでした。幼い娘はこのホールを、ホグワーツの図書館にたとえたものでした（「ハリー・ポッター」を読んだ方にはわかっていただけだと思います）。図書館は本当に魔法のような作業環境でしたから、このたとえも的外れとは言えないでしょう。

日本やその他の東アジア諸国の文化、芸術、歴史に関する蔵書のおかげで、その地域の歴史や文化に関するどんなテーマも調査することができました。便利な電子目録で、必要な資料も

わずか数秒で見つけられました。さらにほんの二分ほどで、書庫の書棚から必要な本を手にすることが出来ます。ロシアではここまでの膨大な日本語や英語の特殊な資料にアクセスすることはできません。日文研で研究を始めてから最初の四ヶ月間は文献調査に明け暮れました。私の関心がある分野での日本や西欧の最新の研究成果を知ろうと、日夜資料を読み続けました。この期間でどれだけの新しい情報を得ることができたか、言葉にはしがたいものがあります。

息抜きとして書庫の書棚の間を散歩したものです。その間にも興味深い資料を見つけたことがあります。そのようにして見つかった資料の多くは私の研究に直接はかかわっていないものの、日本の歴史や文化に関するもので、「日本」という世界観に色彩を補い満たすものでした。

日文研は素晴らしいところがありました。まず、手つかずの自然に囲まれながらも生活上の不便がないということからはじまって、ありとあらゆる点でここまで便利な生活上、仕事上の環境に恵まれたことはこれまでにありませんでした。この研究所で一年間を過ごすうち、夜ごとの鹿の鳴き声も耳慣れたものになりました。徹夜で作業をした時などは、日文研ハウスの窓から原っぱを散歩する鹿の姿を見かけたものです。また、猿が時としてセンターの屋根を跳ね回ることにも、鳥の鳴き声のポリフォニーにも、そして何よりも極めて澄んだ空気にも馴染むことができました。ここの空気には香りも味もあるように感じられたものです。

このような環境で研究をすることは満足の一語につきます。センターの隔離された環境に疲れたときは、娘と一緒に京都の街中まで出かけました。日本の古都には驚くようなエネルギーが秘められています。どういうわけか、ここでは一見矛盾している、静けさと程よい喧噪と、人混みとが共存しているのです。祇園の通りを歩き、多数のお寺や神社を訪れたことは研究に取り組むための支えとなり、内なるエネルギーを満たし、何よりも日本文化の精神に入り込む

ことができました。多くの外国人研究者が、日本文化を研究する外国人研究者のための研究センターを、京都にこそ創設すべきとした発起人に一度ならず感謝したことを思います。

日文研で過ごした一年間を回想するにあたって、私の研究をサポートし支えてくださった多くのスタッフのことを感謝の念を持って思い出さずにはいられません。なかでも日文研に招聘してくださった戸部良一教授、戸部教授が日文研を去られてから私の研究をサポートしてくださった佐野真由子准教授に感謝の念を表します。

日文研では充実した研究ができたほかにも、研究成果を発表する場も与えてくださいました。長期研究で訪問した研究者すべてに、その研究成果を研究者相手に発表するのみならず、日本の一般の聴講者にも聞いていただく機会が与えられていました。

私人人としては、京都の一般の方々の前での発表は身震いのするような出来事となりました。二〇一四年八月、第二七七回日文研フォーラムで、「森有礼が見た19世紀半ばのロシア帝国―虚像と実像」をテーマに発表しました。準備中は日ロ関係の歴史が聴衆の皆さんにとって関心があるかどうかと心配でしたが、杞憂であったことがわかりとても安堵しました。発表までに会場は満員となりました。聴講者の方々はとても注意深く発表を聞いてくださり、発表後は質問もあり、感謝の言葉も頂きました。私の研究テーマは、今日の所謂メインストリームである歴史と文化の対話からはかけ離れたものですので、日本人とロシア人の交流初期の歴史に、京都の聴講者の方々が心から関心を寄せてくださったことが一層嬉しく感じられます。

こういう公開発表は素晴らしい機会だと感じられます。そのおかげで自分の研究成果を、本来届けるべき人々に知らしめることができるからです。学術の世界がある意味閉じられた場所であることは、その深刻な欠点のひとつでもあります。われわれは研究に取り組み、そのため

に多くの時間やエネルギー、時には納税者のお金をも費やしますが、その研究成果が社会の共有資産になるとは限りません。

学術雑誌への寄稿は研究成果を知らしめるためのよくある手法といえます。しかし日本の学術雑誌に外国人研究者が寄稿することはそう簡単ではありません。日本語を母語としない研究者が欧州言語から日本語にテキストを移そうとするとき、論文の言葉は変化を強いられますが、それが肯定的に作用しないこともあります。というのも、日本語を知っている研究者が、同時にすぐれた翻訳者であるとは限らないからです。研究者の日本語の知識は日本語の資料を読むためには十分かもしれませんが、自分の考えやアイデアを、日本の学術語の規範に即しつつ伝えるためには不十分ということもあるからです。

結果、外国人研究者の多くが日本をテーマにした研究を、その国際的な言語の地位をも考慮して、英語で発表したがる傾向があります。それらの研究は専門家に対しては知られるようになりますが、やはり言葉の壁の問題から、日本の読者に広く知られることはありません。

ですから、外国人研究者の研究テーマに関心のある人ならだれでも聴講できるような、公開発表の場というのは、非常に重要な要素だと思ふのです。事実やヴィジュアル、デジタルの情報にくわえて、そのような場では、学術上の様々な課題や問題に対する日本の従来のそれとは違ったコンセプトやアプローチの仕方の本質を、聴衆に届けることができます。

最後に、今一度日文研のスタッフの皆さまのお仕事、招聘研究者に対する気配りやお心遣いに感謝するとともに、センターの今後の一層の発展と、これからも充実した事業をなされるよう、お祈りしたいと思います。

(極東連邦大学助教授)